



●発行  
早稲田大学校友会  
鹿 児 島 県 支 部

●住所  
鹿 児 島 市 金 生 町 3-1  
山 形 屋 本 部 秘 書 室  
☎0992-27-6310(代)

# ベルリンの壁

早稲田大学校友会鹿児島県支部長

松 元 茂



スイス航空の791便が、やがてクローテン空港に着こうとする折、窓外の遙か雲の上、アルプスの山々が白く輝いているのが見え、心躍る思いであった。

スイスは四回目の訪問であるが、山に登るのは初めてである。標高三四五四米のユングフラウ、難なく登山車で登った。「空気が薄いので、急いで歩くと危険です」とガイドに言われる間もなく、A夫人が崩れるように倒れた。一台の担架がサツと現われて、A夫人を連れ去った。手回しの良さにびっくりである。

チューリッヒのクローテン空港視察の後、世紀的瞬間の迫るベルリンへと向かった。十月三日は、東西ドイツ合併の日である。空港の視察もそこに、早速ベルリンの壁に向かった。生々しい壁の近辺は観光客で賑わっていた。露店が両側に並び、軍服・帽子・ベルリンの壁を砕いた石ころを戸板に並べ売っていた。石を買い求め、帰国後ビニール袋にベルリンの石と書き添え、お土産に差し上げたところ、何よりも珍しがられ喜ばれた。

夕食を終って時計をみると、いつの間にか十時をまわっている。十月三日午前零時を期して、東西ドイツ合併という歴史的瞬間が訪れるのだ。東西ベルリンの分断の象徴でもあったブランデンブルグ門前の広場で、大集合が催されるという。千載一遇の好機、これを見逃してなるものかと、パツと外

に飛び出した。おびただしい人々の群れである。肩を組んで歩く若い男女のグループ、手をつないで声高らかに進行曲の歌を合唱しながら闊歩している老若男女、ブランデルグ門へ、ブランデルグ門へとひたすら歩き続けている。そこに行きさえすれば途方もない幸せにめぐり会えるかのように、人々の目は期待と興奮に輝いている。そしてハツとした。人々の目に涙が光っている。敗戦の結果とはいえ、本来一つの民族が人為的に分断され、二つの国家をつくらされたその不条理が、恐らく全ドイツ人にとって、筆舌に尽くし難いものであったのであろう。我が日本においても、終戦時に同じように分断国家にされる危険があったという。北海道がソ連に、九州・沖縄が中国に分断されていたならば、日本の今日の繁栄・幸福はなかつたであろう。この悲劇を味わわずにすんだ我々は、神に感謝せざるおられない。

ブランデルグ門広場では、人・人の渦で身動きがとれない。老若男女、興奮の極に達している。時に、ふつと見上げると雲一つない星空の中天に、今日のこの日を祝福するかのよう、まん丸い月が皓々と白く光り輝いていた。人の群れは厚さを増すばかりである。下手すると大群衆の中から脱け出すことができなくなる恐れがある。そろそろ限度かもしれない。

い。人の渦から脱出して踵を返すことにした。ふとノドが渴いてきた。探せど探せどコインの自動販売機が見つからない。聞けば、泥棒に狙われるので青空の露天にはおけないと言う。かつて来日外国人に東京の第一印象を聞いたとき、意外にもコーラ等飲料水の自動販売機が至る所に置いてあるのに驚いたと話していたことを思い出した。自動販売機一つが平和なシンボルとは、日本は本当に平和な有難い国である。

興奮のベルリンを後に、次の訪問地はバルセロナである。世界の首脳がベルリンに集まっているので、空港の整備は嚴重であらうとは予測していた。早速、トランクを開けるとの事である。ベルリンの壁の石で重たいトランクを開け、荷物検査も一段落したところでトランプがおきた。チェックインのため、二手に分かれて並んでいた一方の入口で、途中から婦人の係官がクローズの立板を出して引き上げてしまったのである。結局、我々一行二十八名の内、十名がとり残されることになった。団体のチームであることをいくら説明しても通じなかった。残された者が今夜中にバルセロナに無事到着できるのか、不安を胸に機中の人となつた。午後三時三十分、無事着いた。オリンピックを控え、空港は大工事の真っ最中であつた。ところが二組の夫婦のトランクがなか

なが出てこない。どうやら間違えてロンドンに運ばれてしまったらしい。その内の一組とは、私と家内である。もう一組のご夫婦とあわせて百貨店に駆けこみ、日用品を買い揃えた。

バルセロナは二十二年振りの訪問であつたが、百貨店の品揃えを見て、昔と比べ飛躍的にスペインの国民生活が豊かになっていることを実感した。オリンピックのメインスタジアムの見学は勿論、ピカソ美術館、ガウディの公園など、見るべきところが沢山あるのを知つた。その後、バルセロナでひつたり事故、パリではホテルの停電事故など、かねて経験しないトランプの多い旅であつた。

しかし不思議なもので、今ではその一つ一つが思い出となり、その時の訪問団のチームの方々とは、思い出の数々を種に、いつまでも親しくさせてもらっている。

(S 25年政経学部卒)

**早稲田大学校友会  
鹿 児 島 県 支 部 総 会**

皆様、お誘い合わせの上お気軽にご参加ください。

記

- と き 7月18日(土)  
午後5:30~(総会後懇親会)
- と ころ 山形屋7階1号社交室  
☎(0992)27-6162
- 会 費 6,000円(運営費込み)

# 郷里に戻って

鹿児島銀行本店営業部

上片平 一 郎 (S 53 年商学卒部)



東京、横浜での二十年の生活に別れを告げ、今春、鹿児島へ戻って参りました。

二十年前、早稲田大学の大隈講堂の前に立ち、「これが、祖父と父の出た早稲田か」と、言いようのない感銘を受けたのを今でも覚えています(祖父直助は明治四十二年、そして父良介は昭和十五年に商学部を卒業致しました)。

最初の下宿は、夏目漱石の「硝子戸の中」という短編に出てくる喜久井町の夏目坂の近く、誓閑寺というお寺の境内にありました。緑が少なくなりつつある中、この下宿は樹木が多く、文学部の裏手ということもあって、静かな環境にありました。

大学の最初の四年間は、文学部の心理学で実験心理学を学びました。往時の大学はまだ学生運動の色が残っていて、ロックアウト

も何回か行なわれました。このよ

うな勉学の合間(?)に、クラブ(合唱をやっていました)や、旅行などの課外活動にいそしみました。

文学部の心理学を終了した私はマーケティングリサーチの手法を勉強したくて、商学部に学士入学し、広告論を専攻しました。卒業前に電通の広告論文に応募し、入賞したの思い出の一つとなっております。

卒業後、横浜銀行に就職した私は、支店経験を経て、昭和六十三

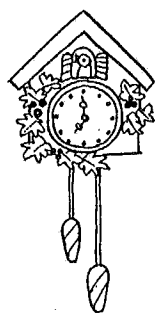
年より二年半の間、株式の店頭公開準備室長ということで、半導体製造装置メーカーの「アパールデータ」というところへ出向しました。

平成三年、日本証券業協会に無事店頭登録が受理されましたが、証券会社や大蔵省財務局等への提出資料の作成作業は筆舌に尽し難い膨大なものでした。この間作業を共にした出向先の方々や証券会社、監査法人の先生とは今でも親しく手紙のやりとりをしています。

銀行に戻ってからは、本店の営業推進部で法人メイン化チームという部署に属し、企業への総合的支援を通じて、より結びつきを強くするという類のことをやってきました。特に私募債・外債発行、

株式公開支援というのが中心の仕事でした。

今般、父の健康状態が思わしくなかったことから、転職を執行しました。職種は同様の銀行ということで、あまり戸惑いは感じませんでした。折角戻って来たからには、自分の価値観を大切にしながら、郷土のために何か役に立ちたいと思います。私を十八歳まで育てて来た故郷に何かお返しすることはないか。今、切実にその事を考えています。



# 「人生意気」をめざそう

南日本新聞社編集局写真部

税 所 陸 郎 (H 3 年第一文学部卒)



百四十四というびつたりの単位数で卒業した。予定と違ったのは、四年が五年に延長されたということである。でも、それらも愛きょう。人生意気に感じたらびくともするなど大隈先生も言っておられるのではないか。

これも早稲田人の心のゆとり。おおらかさ。五年間もいたおかげで、ずいぶんと懐の深い人間にな

そういうロマンティズムを感じさせる雰囲気、確かにあの界内にはあるのだ。

さて、そういうロマンティズムを十分に堪能した私、税所陸郎は、現在南日本新聞社の写真部に存籍している。在籍しているだけでなくて、毎日汗水たらして頑張っている(つもりだ)。冗談抜きで体力勝負の部署。肩にかかるカメラバックの重量と照りつける日差しが痛い。けれども、「これは」という写真が撮れたような気がしたときは、してやったりと足どりもスキップ、鼻歌まじりである。逆の場合は、現像するのおおっくうな気分になる。これも競争の厳しい現実。大隈先生、私も社会に出て少しは成長いたしました。これから「人生意気」を感じさせるよう努力していく所存であります。

最後に、テレビカメラの邪魔してパシパシとシャッターを切りまくっている童顔の青年(写真上)を見かけたら私だと思ってください。質より数で勝負するこの男に声をかけてください。方には、いままら無料出張サービスをさせていただきます。



早稲田大学第一文学部に五年間在籍した。入学当初の計画どおり、

# 在野の精神

鹿兒島県庁港灣課

佐多悦成 (H3年理工学部卒)



都の西北から我が故郷に帰ってきたのはつい一年半前だ。四年間早稲田の杜に通い、学問を学んだかというところを正直言ってみよう。

野球シーズンには神宮へ行き、ラグビーシーズンには秩父宮、国立競技場へ足を運び、そのたびに高田馬場、新宿あたりで酒を飲みながら、あたかもその道のプロのように試合の分析をしていた。また、早稲田の同郷の友と酒を飲むと、女の話からいつの間にか鹿兒島をこれからどうすればいいのかわからない話で朝を迎えていた。私が早稲田で学んだことは、いろいろな人との会話の大切さであったと思う。自分の思いもなかったことを他の人は考えていることが多い。その中には納得できるものもあるが、どう考えても納得できないこともある。そこで議論

が始まるのである。自分のアンテナを精一杯広げ、「ふるい」にかけて、「あてもない」「こうでもない」と言いながら、お互いをさらけ出して議論をする。結局、答えが出ないことが多いのだが、お開きのときには相手が違ってみえた。相手の全てを知っているような気がしてきた。しかし、その後また議論をする自分の考えもなかった意見が出てくる。実に楽しいことである。

現在、鹿兒島県庁港灣課に土木技師として勤務して一年半。まだまだ勉強・経験不足であるが、そこは学生のときに立てたアンテナが役にたつのである。当然、勤務時間にはアンテナを開く。しかし多少肩が凝る。みんなと酒を飲みに行つたときは力を抜いてアンテナを開いておくことができ、なかなかいい話が聞ける。学生気分が残っている証拠だろうか。

これから、県職員として県民の意見を聴き、それを選択していかねばならないのであろう。選択するのは忍びないことであるが、広げつばなしのアンテナではいけないと思つている。決して金持ちとはいえない鹿兒島県だから、アン

テナで集めた声を金の代わりに頭を使い、実現させようとする。その中でどうしようもないものはふるい落さねばならないだろう。しかし、これは押さえつけではない。開いたアンテナは叩いたり押さえつ

# 早稲田追想

鹿兒島市役所保護第二課

室田久敏 (H4年第一文学部卒)



都の西北、早稲田の杜を出て数ヶ月、卒業生に代わつて新入生が入り、かぐわしき清新の気が早稲田の杜に満ち満ちていることと思う。

ようやく卒業して、市役所保護第二課に配属され、責任ある仕事を任されているというのにまだ学生気分が脱けきれず、毎日、実社会の厳しさとの直面に戸惑い、新鮮な驚きと身のひきまらぶような緊張で期待と不安とが微妙に入り混じり、ブレンドされた感情が自分の中に醸成されているように思える。

けるものではなく、受け取るものであり、情報を発信するものであるからだ。早稲田には在野の精神がある。私にも四年間で少しはその精神が体にしみついていると思つている。

くりの商店が、いつのまにか近代的なビルディングに変貌しており改めて時の移ろいを痛感すると共に、何年後か再び早稲田を訪れる機会があつたとき、果たして私の在校当時の雰囲気を保ち続けているのか大いに不安になつた。しかしながら、少なくとも早稲田での数えきれないほどの思い出は、私の人生を一冊の書物に例えるとき、青春という項目の多くの頁を費すほど貴重この上ないものであり、決して色あせることはないだろう。

学生時代、早稲田は私にとつて普段は、それほど愛校心とか母校に対する誇りとか強烈な印象あるいは感情を抱かせる存在ではなかったように思う。しかしながら、早慶戦やラグビーシーズンともなれば、競技場では友人と共に声をからして応援し、テレビの前ではブラウン管に釘付けになるなど眠つていたはずの愛校精神が一挙に爆発したものである。今になって思えば、普段からそのような感情を持つていることに照れや気恥ずかしさを感じていただけのことだったのかも知れない。

「青春は単なる人生の花盛りではなく、来たるべき結果の秋への準備の季節である」とは、歴史家・竹越与三郎の言葉であるが、この言葉の如く、早稲田で出会つた多くの友や、大学生活での貴重な経験を心の糧として、早稲田精神の支柱たる「野の心」を忘れることなく、社会人として、そして早稲田人として生きていきたいと思つる今日この頃である。

\*コンペ成績表\* 上位20名成績

開催日：平成4年4月29日  
コンペ：早慶戦

Table with 16 columns: Rank, Name, OUT, IN, GROS, HDCP, NET, Rank, Name, OUT, IN, GROS, HDCP, NET. It lists the top 20 performers of the tournament.

僅差で敗れる

第15回早慶対抗ゴルフ記念大会

絶好のコンディションの中、第15回目の早慶ゴルフ大会が、名門蒲生カントリークラブで行なわれた。

総精鋭34名(内早稲田14名、慶応20名)で熱戦の火ぶたが切つて落とされたが、結果はご覧の様にトータルK76・34W76・82とわず

東京でのサラリーマン生活に終止符を打ち、昨年の夏から始めた故郷・鹿児島での生活もすでに一年になろうとしています。幾度となく降灰の洗礼も受け、特に今住んでいる鴨池新町地区は桜島に近いせいか降灰量も多く、これから夏を迎えるにあたり火山活動の静まるのを願いつつ毎朝桜島を眺めています。

早稲田を卒業して十一年。校歌を歌う機会も少なくなりましてが、昨年十一月に開かれた全国早稲田学生会連盟OB総会の時、久しぶりに校歌を歌うことができました。当時、大隈庭園は工事中でしたが、一部完成した会館で総勢約百名、現役学生も混ざり合つて歌う校歌は、エールも締まって、とても気分がいい思い出となりました。新しい会館完成の折はまた、是非總會を開いてもらいたいと後輩達

かの差で今回も慶応に優勝杯をさらわれてしまった。人数においても6名の差があり、ダブルペリアで上位10名のトータルとなれば、人数が多い方に有利に展開するのは言うまでもない。今回の敗因の一つには、小生のスランプもかなり響いたようで、某幹事長にもかなりお小言をいただいてしまった。これで対戦成績は、5勝10敗。(6連敗)である。

個人戦の方は、何とかエース川畑孝則氏(S46年商学部卒)が優勝(グロス83、ネット72・2)し、面目を保った。次回は、万難を排し、エース級の方々の参加を願ひ、一矢を報いたいものである。とにかく、最後の親睦会費を払うくやしきは、何とも言えません。

幹事 大西儀朋

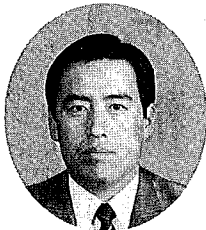
(S59年教育学部卒)

鹿児島海陸運送(株)取締役

学生時代にタイムスリップ

米盛建設(株)常務取締役

米盛 庄一郎(S56年理工学部卒)



わな。水にはレモン汁が入っていて、何杯おかわりしてもタダ。何時間いても店が閉店するまでOK。連絡ノートも置いてあり、友人達とのコミュニケーションが保ちやすい。マジジャンのメンバーにも不自由しない。など。でも現在、店も息子さんの代に変わり、稲門会のたまり場もいつのまにか移ってしまいましたようです。昨年訪

理工学部のある大久保校舎から本学まで徒歩で約二十分、通常体育の授業でもなければ大久保校舎

当会報委員長で、県支部常任幹事として校友会の発展に尽力されてきた中村眞氏(S32年政経学部卒)が、去る二月二十五日に急逝されました。冥福をお祈りします。なお新会報委員長には、吉田守氏(S30年教育学部卒)が就任されました。今後も会報委員一同故中村氏の分まで頑張る所存です。皆様のご協力をお願い致します。

編集後記